

論文 / 著書情報
Article / Book Information

論題(和文)	知財見聞録, 2017年12月アレクサンドリアにて講演
Title(English)	
著者(和文)	田中義敏
Authors(English)	Yoshitoshi Tanaka
出典(和文)	発明, Vol. 115, No. 3, pp. 28-29
Citation(English)	THE INVENTION, Vol. 115, No. 3, pp. 28-29
発行日 / Pub. date	2018, 3



知財見聞録

2017年12月アレクサンドリアにて講演

東京工業大学 工学院 経営工学系・経営工学コース 教授 田中 義敏

昨年12月、エジプト第二の都市であるアレクサンドリアに本部を置くエジプト日本科学技術大学（E-JUST）において開催された研究セミナーで講演を行ってきたので、簡単に紹介する。

遠い旅程を要するアレクサンドリア

地中海に面するアレクサンドリアはナイルデルタの北西端に位置している。アレクサンドリア市は、紀元前300年ごろに世界最古の学術の殿堂として建設されたアレクサンドリア図書館が有名である。そこでは多くの思想家や作家の著作、学術書を所蔵していたそうだ。

以前は、日本からドーハ国際空港（カタール）経由でアレクサンドリアのボルグ・エル・アラブ空港へ飛ぶ空路があったが、2017年6月5日、サウジアラビアを中心としたペルシャ湾岸諸国および、エジプトを含むアフリカな

どのイスラム国家の一部が、カタールに対して国交断絶を表明して以降、状況が変わっている。カタール航空は、前記諸国のなかでも特にエジプト、サウジアラビアおよびバーレーンの領空通過を禁止されることになり、その結果ドーハからの空路がなくなってしまった。

なお、アレクサンドリア市の南西40kmにあるボルグ・エル・アラブ空港は、2010年に日本政府の援助により建設されたもので、わが国による国際支援の代表例の一つである。

ということで、昨年6月以降の日本からアレクサンドリアへのアクセスは、ドバイ経由でカイロへ飛び、そこから約3時間の車移動でようやく当地にたどり着くものとなっている。今回は、筆者が自宅を出てから現地ホテルにチェックインするまでに28時間もかかる長旅となった。

公開セミナーでの講演

E-JUSTの概要については、本誌2017年2月号においても紹介したが、2008年9月の日本・エジプト両国首脳による署名からプロジェクトが設置され、日本型の工学教育の特徴を生かした少人数、大学院・研究中心、実践的かつ国際水準の教育提供がスタートした（第1フェーズ）。現在は、2019年1月までの期間で第2フェーズが進められている。

筆者も毎年秋学期の集中講義に出かけているが、今回は研究セミナーと銘打って学内外に案内した公開セミナーでの講演も行ってきた。

当初は高等教育における教育者の育成という要請から大学院教育に焦点を当ててきたE-JUSTだが、昨年新学部を設置している。学部生の入試が行われ、講義室やドミトリーなどの学内施設の充実も図ってきた。2016年の訪問時と比べるとたった1年間で目覚ま



鈴木E-JUST総括副学長と



講演会場の様子

しい発展を遂げている。

今回の講演は、新たに建設された本館管理棟のProf Ahmed Abou Ismail Theatreにおいて開催された。そのテーマは、“How to promote utilization of patent publications for academic research in the field of science and technology?”。E-JUSTにおける研究成果の特許出願が出始めているなかで、知的財産権としての権利化の重要性、特許出願時点での先行技術調査にとどまらず各研究室で進めている科学技術研究自体に特許情報を活用することの意義と具体的な手法について紹介する機会になった。

特許情報の活用と研究成果の商業化

科学技術研究に特許情報を活用する視点は、日本の大学においても、これま

で十分に認識されていない。多くの研究者が論文を重視し、特許出願に積極的でないのが現状だろう。そして、特許出願に積極的な研究者であっても、自らの研究成果を出願する際に特許情報の検索をするものの、研究テーマ設定、仮説定立・検証、実験装置設計など、日頃の研究活動自体に特許情報を活用することは少ない。その一方で、大学の研究成果の商業化や産学連携の促進が叫ばれており、大学で生まれた発明などの権利化が求められている。

この傾向は大学の研究成果をもとに商業化に取り組む企業が市場における独占的地位を確保するうえでも、また大学が実績に応じた実施許諾料を受けらるうえでも重要なことである。そして、その研究成果の商業化を進めるために欠かすことのできない、企業意思決定に際しては、当該成果が市場ニーズ

を満たすことが死活的な視点になる。

例えば特許情報には、「解決すべき技術的課題」という欄があり、これは市場ニーズを反映したものとして捉えられる。そのため、大学の研究成果を企業に移転して商業化を図るにあたっては、科学技術研究自体に特許情報を活用し、市場ニーズをにらんだ研究テーマを設定することができる。そしてその研究成果の特許出願等により権利化し、企業が安心して実施許諾を受けられる体制を整備することが重要になるだろう。

1時間という短い講演であったが、会場の聴講者を交えた貴重な質疑がなされ、今後の科学技術研究に対する何らかのヒントを与えられたのではないかと思う。

日本とつながる柔道家

1984年に行われたロサンゼルスオリンピックの柔道男子無差別級決勝で山下泰裕と対戦し銀メダルを獲得したのはエジプトの柔道家モハメド・アリ・ラシュワン（Mohamed Ali Rashwan）。当時、試合中に山下の負傷している右足を攻めなかったことが話題になった。

彼は現在アレクサンドリアに住んでおり、E-JUSTキャンパス内に建設中の道場が完成すると、そこで柔道の指導にあたるとのことだ。日本とエジプトの文化の融合が進展される期待があまり楽しみだ。



筆者の熱演



本館管理棟で後藤E-JUST研究担当副学長と